
 <書 評>

慶応大学教授 小林 忠義・他 著

胸 腺 —その基礎と臨床—

東京大学医学部血清学教室教授 鈴木 鑑

「謎につつまれた臓器」として機能の明らかにされていなかった胸腺は、その生体における意義が近年次々と解明されると共に注目をあびるようになってきた。それは、古くから考えられていた内分泌的な機能とは異なる方向への研究の発展によるものであって、幼若動物での胸腺摘除術の開発によって胸腺のもつ特殊なリンパ組織としての機能と、免疫反応に対する胸腺の指導的な役割が明らかになったためである。

本書は、この方面における最もすぐれた研究者の協力によって出来上がったものであり、形態と機能の面から、また基礎と臨床の面から、あますところなく胸腺の問題をとりあげている。

まず基礎編においては、胸腺及び胸腺細胞の構造と発生といった形態学的な面から説きおこし、次に胸腺の重要な機能と考えられるリンパ系の調整の問題に入り、多くの実験的事実から中枢性リンパ組織としての胸腺の役割を論じ、胸腺と免疫の関係については、個体発生と系統発生の立場から、また、体液性免疫と細胞性免疫の立場から詳細に論述を進めている。胸腺の機能に関するこのような記述は基礎編の大部分を占め、本書の最も特徴ある部分をなしている。

臨床編には基礎編と大体同じ量の紙面が与えられている。胸腺学の臨床はまだ確立されていないが、臨床面からも胸腺のもつ意義を認識しな

おす必要に迫られているのが現状である。本書ではこれに応じて、近年広く問題とされ、従って比較的解析の進んでいる自己免疫疾患と胸腺との関連、胸腺の腫瘍を含む胸腺病変を中心に、これに関係のある臨床的な問題について分りやすく記述している。

なお、巻末に1,000を越す膨大な量の参考文献をあげてこの方面の研究者への便宜をはかっているのも、大きな特色であろう。

本書は、胸腺に関するまとまった書物が望まれている現在、まことに時宜にかなった出版物であり、すぐれた指導書として推奨したい。

B 5版 頁 328 図 39 写真 102
 ￥ 5,400 円 110

 医学書院刊
